

# 源氏供養と普賢十羅刹女像

武笠 朗

本日の私の演題は、平安時代最末から鎌倉時代初期における『源氏物語』の受容のあり方の一側面を美術の側から明らかにしていくということです。

私の専門は美術史、詳しく言えば日本彫刻史です。日本の江戸時代以前の彫刻といえば、中心は仏教彫刻、すなわち仏像ですから、仏像の研究をしていると言っているといいいでしょう。仏像は仏教美術の中心ですから、仏教美術を専門にしているともいえます。

なぜ仏像の研究者が『源氏物語』を語るのかですが、有名な徳川・五島本の「源氏物語絵巻」もありますので、『源氏物語』と美術史の関係はおわかりでしょうが、仏像と『源氏物語』の関係というといささか唐突な感じがいたします。また、私の演題にもあります、「源氏供養」とは何だという疑問を持たれる方もあるでしょう。

門外漢の私が『源氏物語』と関わりを持つようになったのはあるシンポジウムがきっかけです。二〇〇七年三月に

フランス・パリのフランス国立東洋言語文化大学 (INALCO) で行なわれた「源氏物語の文化史―宗教・芸能・美術―」というテーマのものです。これは日本の立教大学との共催で開催されたものです。

ここで、私は仏教美術が専門ということで、小峯和明氏の「法会文芸としての源氏供養―表白から物語へ―」という発表に対するコメントーターとして出席したわけです。門外漢とはいえ私は平安時代後期、院政期の彫刻史が専門で、有名な平等院鳳凰堂の阿弥陀如来像を中心に研究しています。その私にとって、『源氏物語』の院政期的受容という問題は時代相を共有する課題として、大変興味深いものでした。

しかし、いかんせん教養がないため、そもそも「源氏供養ってなに？」という基本的な問題から克服しなければなりませんでした。源氏供養とは、『源氏物語』の作者紫式部とその読者を『法華経』の功德によって救済しようという、いわゆる狂言綺語観に基づく法会儀礼であることを、恥ずかしながら初めて知ったわけです。

紫式部が地獄に堕ちてしまうというのは私にとって衝撃的なことでした。そこで次のようなコメントを考えました。

法会や仏事などの仏教儀礼とその本尊の仏像という課題は、仏像・仏画の世界では検討すべき当然の課題です。近年、一層その関係性が問われています。仏像・仏画の仏教美術としての性格が改めて重視されてきています。

源氏供養という『法華経』を供養する法会には、どのような尊像がその本尊として据えられたのか、供養された経典とともに法会の本尊の顔を想像してみよう、と考えてみたわけです。

本日の話はその時のコメントに基づくものです。まず源氏供養とはどういうものかその概要を紹介し、続いて源氏供養の法会の復元を試みます。その場で供養された『法華経』と仏像が、それぞれどのようなものであったかを推定

したいと考えます。

仏像には、標題にもあげられている普賢十羅刹女像が推定されます。特にその画像に描かれる十羅刹女像が、唐風の装束から日本風の和装へと変貌するきっかけとして、この源氏供養を想定しています。そのような推定を行ないたいと思っています。

### ■ 狂言綺語と源氏供養

『源氏物語』は院政期十二世紀に入つていよいよ愛好され、さまざまな享受と再創造の展開を見せ、源氏文化を形成します。源氏供養は、徳川・五島本の「源氏物語絵巻」などと同じく、『源氏物語』から生まれたさまざまな文化現象の一環に他なりません。また、それと同時に、やはりこの院政期になつて、その意味の重さを増すに至つた狂言綺語への対処の一事例でもありました。

では、その狂言綺語とは一体何だったのでしょうか。美術史が専門の私の説明でははなはだ心もとないのですが、一応、その一般的な概念を説明してみましよう。『広辞苑』第六版には、「道理にあわない言と巧みに飾つた語。小説・物語または歌舞音曲などを指している」とあります。言葉自体の意味はその通りなのですが、当時の人々の認識に、和歌や物語などの文芸を狂言綺語として、仏教信仰に対する過ちとみなす自省の認識があつて、そうした仏教信仰に対して文芸を卑下する自省の認識を狂言綺語と呼んでいるといえます。

もつとわかりやすく言いますと、和歌や物語は言葉をたくみに飾つて作文された架空の空事であり、そういったものに熱中するということは、成仏を願う行為としては大いに誤りであり、罪であるということです。要するに仏教信仰に対して罪なのだ、ということですから、つまり、そういう反省の意識に基づく行為ということになります。

十二世紀に入って、この狂言綺語は重要問題化してきます。ただ、それほど深刻に仏教信仰に対する過ちと考えられていたわけではないようで、一応、形式的に反省するところだったようではあるのですが、ともあれ源氏供養はそうした反省の心を表明する仏教的イベントでした。院政期における『源氏物語』への耽溺が聖なる信仰への負い目となって顕在化し、その克服、あるいはその言い訳的な解決が、源氏供養で果たされたわけです。

### ■源氏供養

では、源氏供養とは具体的に何がどのように行なわれたイベントだったのでしょうか。

源氏供養とは正しく言うと、源氏一品経供養です。一品経については後で触れますが、要するに『法華経』を供養する仏教会ということなのです。この法会がいつどのように始まり、どの程度普及したのかなどは明らかではありませんが、平安末期に行なわれたある源氏供養を端緒に、以後、豊かな法会文芸として源氏供養文芸が生産されたことは確かかなようです。その、ある源氏供養の実態を伝えるのが「源氏一品経表白」です。以下、「表白」と略します。

表白とは、一般に法会の願意・趣旨を華やかな美文で綴った文章です。これを法会の導師、つまり法会を仕切るお坊さんが読み上げます。この「表白」は、説法唱導の名手と謳われた安居院澄憲の作とされています。澄憲については、また後ほどお話ししますが、その伝えるところの願意はおおよそ次の通りです。

紫式部作の『源氏物語』は男女の愛を語る物語の中でも特に秀逸で、男女こそってこれを読み恋情にひたるが、その罪で作者も読者も六道輪廻の罪を負い、奈落に落ちてしまっただろう。故紫式部の亡霊も自らの罪業が重いことを人の夢をして告げた。そこで、「禪定比丘尼」が願主となり、罪深き紫式部と『源氏物語』の読者を救うため、『法華経』を書写し、見返しに『源氏物語』を図して飾り、それを供養して、狂言綺語転じて仏奉賛の具となして成仏に至

らんことを願う、という内容です。

この内容はのちにさまざまなバリエーションを持ち、能の演目にもなったりもします。

例えば『宝物集』所載のものにおいては、「紫式部そらごとをもつて源氏物語を作りしゆゑにぢごくに落ちてくげんをうく。はやく源氏をやきすて、一日経をかきとぶらふべし」と、よりダイレクトに紫式部の罪が語られています。

### ■法会の復元

では、この「表白」をもとに、この時の源氏供養の様子を復元してみましよう。まず、法会の願主禪定比丘尼ですが、これに擬せられているのは美福門院加賀という女性です。彼女は藤原親忠の女で、美福門院得子に仕え、はじめ藤原為経の妻となつて、絵師兼歌人の藤原隆信を生み、のちに藤原俊成に嫁して定家を生みました。つまり、歌人定家の母ということです。

この美福門院加賀の出家は夫俊成の出家と同じく安元二年（一一七六）とみられ、またこの源氏供養の時の一品経書写に、加賀の娘八条院按察の夫藤原宗家が結縁したとみられるのですが、この宗家の没年は文治五年（一一八九）なので、その間にこの法会は営まれたものと推定されています。つまり、一一七六年から一一八九年の間にこの源氏供養は行なわれたのだろうということです。

この「表白」の作者であり、おそらく法会の導師を勤めたとみられるのが澄憲です。澄憲は藤原通憲（信西）の息子で天台宗の僧侶です。説法唱導にたくみで「説法優美」とされた弁舌で聴衆を魅了し、いわゆる安居院流唱導の祖となります。唱導とは、法会の際に表白文や願文を節をつけて上手に読み上げることです。お経を詠んだり、表白文

や願文を節を付けて、しかも美声で魅力的に読み上げる、澄憲はそういうことがうまかったようです。

澄憲とそれを継いだ聖覚などの安居院流の唱導の研究はすでに多くの成果を得ていますが、ここで注目しておきたいのは、澄憲の唱導には女人・母性重視の傾向が強いとする小峯和明氏の指摘です。澄憲の優美な説法の主な享受者が、女院やその女房などの宮廷女性であり、それへの支持拡大が安居院流唱導の戦略であったと解釈できます。

また、後で詳しく述べますが、マイケル・ジャメンツ氏は、澄憲以後の安居院流の僧が主導した法会において、普賢十羅刹女像が多く用いられていることを指摘しています。これは大変に興味深いことで、澄憲のまわりに女性、そして普賢十羅刹女像が登場することに注目しておきたいと思います。

#### ■一品経の復元

この「表白」は『法華経』を供養したことを伝えています。この『法華経』はどのようなものだったのでしょうか。この源氏供養は『法華経』を書写供養することによって仏を讃え、紫式部や願主自らを含む読者を救おうとしたもので、法会の種別としては、『法華経』供養ということになります。「表白」に「殊に道俗貴賤を勧め、法花廿八品之真文を書写する」とあるように、『法華経』八卷二十八品を道俗貴賤で分担して書写したものでした。いわゆる一品経です。

一品経とは『法華経』などの經典を、品（＝章や節）ごとに、結縁者で分担して書写すること、ないしはそのお経のことです。この善行の共同参加者を結縁者と呼びますが、この結縁者を募って、分担して行なうということで、そのため結縁経ともいいます。

この分担については、後藤丹治氏の推定によれば、前述した息子藤原隆信と娘婿である藤原宗家が制作したことが

知られており、この二人を含めて美福門院加賀の子女や女房等周辺の女性が結縁して分担書写したものと思われる。女性が中心であったと考えていいと思います。

では供養された『法華経』は具体的にどのようなものだったのでしょうか。それが「表白」に記されています。この経巻は「経品々に即ち物語の篇目を宛てる」であり「巻々の端に源氏一篇を図す」というものでした。「巻々の端に源氏一篇を図す」というのは、経巻の表紙の裏の見返しに描かれるいわゆる見返し絵に、「経品々に即ち物語の篇目を宛てる」とあるように『源氏物語』各帖に由来する図様の絵、すなわち源氏絵が描かれていたことを示していると考えられます。

つまり、お経の見返し絵に源氏絵を伴なう『法華経』です。このことから改めて、梶谷亮治氏が「平家納経」について興味深い視点を示しています。梶谷氏は源氏供養の『法華経』の事例を引いて、「久能寺経」や「平家納経」などに見られる物語絵のような図様・画風の見返し絵を「物語絵様見返し絵」と呼び、「平家納経」のそれを『源氏物語』に取材した図様ではないかとしています。例えば、「平家納経」の序品ですけれども、これを桐壺に当てたりして、要するに部分的に源氏絵が見返し絵として採用されたのではないか、ということなのです。

物語絵様見返し絵のある品が一部に限られるなど、疑問点も多くあり、検討の余地はあると思われますが、『法華経』という經典への物語絵様見返し絵の導入という、いわば世俗的要素の侵入のきっかけとして源氏一品経を想定したことは重要なのです。

「平家納経」では、お経の最初の部分、つまり見返しの部分に「源氏物語絵巻」のような、女性が登場する美しい絵が描かれています。「平家納経」は平清盛が厳島神社に奉納したもので、いわゆる装飾経です。序品のほか勸持品

薬王菩薩本事品、分別功德品、提婆達多品などにもやはり仏教的テーマで美しい絵が描かれています。

ともかく源氏一品経供養に際して、美福門院加賀以下結縁者によって制作された『法華経』は、徳川・五島本の「源氏物語絵巻」の絵の段を見返絵とする美しい色紙経か、あるいは「平家納経」の物語絵様見返絵のある品のような美しい装飾経であったとイメージしていいと思います。

先ほど、美福門院加賀の息子藤原隆信がこの経巻の制作に関与したと述べました。隆信は和歌と絵画に非常にすぐれた人で、絵画では人物の似顔絵に巧みだったようで、その息子の信実以降を含めて「似絵」描きの家系をなします。神護寺にある「伝源頼朝像」（頼朝像ではないとの説が有力です）の作者に擬せられてもいる人です。ただし今は疑問が呈されていますが。

ですから、この隆信が関わったということならば、その経巻にはかなり立派な装飾がなされたであろうと想像されます。「平家納経」ほどではないにせよ、それなりのものだったろうと思います。

### ■ 『法華経』 関連の法会とその本尊

『法華経』 関係の法会（法華講）には、法華会・法華三昧（法華懺法）、法華八講、三十講、一品経などさまざまありますが、これらはいずれも『法華経』を読む法会です。『法華経』やその関連經典では、その本尊として、釈迦如来、釈迦三尊、普賢菩薩、観音菩薩などが掲げられました。この中で彫像・画像を問わず最も多いのが、普賢菩薩像です。法華堂、三昧堂などのお堂の本尊には彫像が、一品経のような臨時の法会には画像が多く用いられたようです。

この源氏供養は、法華二十八品を結縁者により分担書写し、それを澄憲主導の法会で供養する一品経供養でした。おそらく主催者加賀の仏堂か居宅の仏間などで、そこに澄憲ら衆僧を請じて行なわれたと想像できます。彫像の本尊が別にあつたにせよ、一品経供養の例から、經典とともに何らかの仏像が供養されたものと考えられますが、それはどのような尊像であつたのでしょうか。

仏台に奉懸された新仏の前に、新写の一品経が経机の上の経箱に入れられて置かれ、その前に導師澄憲をはじめ衆僧が坐つて「表白」や『法華経』を誦し、それを加賀以下結縁者が聴講する。そうした情景がイメージされてきます。

供養された仏として可能性が高いのはやはり画像の普賢菩薩像でしょう。さらに進んで言えば、和装の十羅利女像を伴う普賢十羅利女像であつたと考えています。

#### ■一品経供養の事例

一品経供養の事例を史料に追いつながら、源氏供養の様子をより詳細に復元し、供養された仏画が何であつたかに及んでいきたいと思います。

いわゆる一品経の書写・供養は、治安元年（一〇二二）九月に無量寿院で行なわれた皇太后宮妍子（藤原道長女）とその女房たちのそれが早い時期のもので、以後盛んに行なわれ、特に院政期にその事例が多く知られています。

それらは基本的に亡くなった人の追善、つまり亡者追善のために遺族や関係者が結縁した事例がほとんどです。例えば、久寿二年（一一五五）九月五日の近衛院六七日の「結縁経供養」では、関白藤原忠通以下公卿及び忠通室宗子以下女房たちが分担して『法華経』と『金光明経』を書写し、仁安元年（一一六六）九月六日の藤原基実追福の「女

房一品経供養」では、基実母二位殿信子と室六波羅三位殿盛子とそれぞれの女房たち計三十二人が分担して、「美麗究善」の一品経を写真したと伝えられています。こうした事例から考えると源氏供養というのは、一品経供養としてはかなり特殊なケースといえますが、故人紫式部の墮地獄を救済するものであり、故人追悼の要素も含むものといえます。

供養の結縁者は、近衛院六七日の例のように男女混合が一般的で、基実追福の例のように女房（女性）のみ、また男性のみの場合などさまざまで、皇太后宮妍子の例では「君達もろともに契りて」とあつて女性が男性を誘つて、その財力をあてにして、というケースもあつたようです。この源氏供養の場合は、加賀の息子の関与も推定されているので、男女混合か、女性主体で男性の助力を得たか、いずれかと考えられるのですが、法会の願主は美福門院加賀です。すから、女性主体の法会であつたとみてよいかと思われま。

#### ■一品経供養の仏像

ではその法会の場にどのような尊像が据えられたのでしょうか。院政期になつて盛んに行なわれた一品経供養では、仏は何が一般的であつたのでしょうか。

近衛院六七日の場合も、基実追福の場合も、一品経とともに普賢菩薩の画像が供養されました。一品経供養に際して普賢菩薩が多く登場することは、既に指摘されているところです。小井川理氏によれば、平安時代の一品経供養事例でその本尊が知られる十四例のうち、九例が普賢菩薩であり、さらにそのうち画像が六例を占めるということになります。これを踏まえれば、一品経供養であるこの源氏供養でも、普賢菩薩の画像が併せて供養された可能性が高いといえま。

また、「表白」作者澄憲に関してマイケル・ジャメント氏は、澄憲及びそれ以後の唱導安居院流の僧が関与した追善供養の多くに、普賢菩薩ないしは普賢十羅刹女像が供養されていることを願文・表白等を通じて指摘しました。

澄憲に限っても、待賢門院出家時の願文や故建春門院追善供養の表白、上西門院による待賢門院のための一品経表白などに普賢ないし普賢十羅刹女像が登場します。上西門院の例では「又詔女人図十願王十羅刹之聖容」とあり、十願王とは普賢菩薩のことなので普賢十羅刹女画像が描かれたことは明らかです。

さて、以上のことを踏まえたと、澄憲主導の一品経供養であれば、普賢菩薩ないしは普賢十羅刹女像が描かれているということになります。それらを前にして供養が行なわれたものと思います。

#### ■普賢菩薩と十羅刹女像

普賢菩薩は『法華経』巻第八「普賢菩薩勸発品第二十八」と『法華経』の結経である『観普賢菩薩行法経』（『観普賢経』）に、『法華経』を信仰する者の前に現れて、その人を守護すると説かれている尊像で、法華信仰者の念持仏的な尊像として篤く信仰されました。この菩薩が法華信者を守護するために現れた様子をあらわしたのが来儀図です。

その姿は、合掌して六牙の白象に乗っています。画像の東京国立博物館本や彫像の東京・大倉集古館像などの院政期の作品がよく知られていて、その優美な作風からこの期の高貴な女性の発願が推定されています。女性の成仏を説く『法華経』は、特に女性の信仰を得たとされています。

普賢のみ独尊で描かれる普賢来儀図は、やがて『法華経』「陀羅尼品第二十六」の所説に基づき、二菩薩（薬王・勇施）、二天王（多聞天・增長天）、十羅刹女（藍婆、毘藍婆、曲齒、華齒、黒齒、多髪、無厭足、持瓔珞、皇諦、奪一切衆生精氣）、鬼子母を伴って描かれるようになります。これが普賢十羅刹女像です。「陀羅尼品」は、これら諸

尊が陀羅尼の呪文を唱えて『法華経』を広める人を守護すると誓うことを説いています。

十羅刹女をセットで描くことで、法華持経者の守護をより篤くすることを強調するという意図があるものと思われますが、この図像の成立には不明な点が多く、十羅刹女登場の経緯、そしてそれが普賢とセットになる理由や時期は明らかではありません。

ただ十羅刹女像の出現については、承暦三年（一〇七九）には記録に登場し、十二世紀前半から作例が知られています。本格的な画像としては十二世紀の京都・廬山寺本が重要です。この寺は紫式部とゆかりの深い寺で、その普賢十羅刹女像がもつとも古いものとされています。

これ以前の平安期にさかのぼるものは知られていません。記録では、久寿二年（一一五五）十月九日の藤原忠通室、故宗子のための仏事で供養された画像がもつとも古く、おおむね十二世紀後半からこの画像が一般に広まったのだらうと推定されています。以後、鎌倉時代を通じて作例が多く、図像的にいくつかのタイプがあることも指摘されています。

普賢十羅刹女像の十羅刹女像には和装と唐装の例があります。女房風の装束の和装に対して、唐装のそれは、吉祥天などが着ているような襜褕衣風、つまり中国の女性の仕事着風の装束を着ています。以前は、文化の和様化に伴ってまず和装のそれが登場し、鎌倉期の理知的な風潮が唐装のそれを生み出したとされてきましたが、鶴林寺の例など初期の現存作例がいずれも唐装なので、ある時期から和装が登場したと考えられています。和装出現の初期作例としては、「扇面法華経冊子」（大阪・四天王寺）の表紙や「平家納経」見返絵に出てくる十羅刹女の単独像が目まされています。

## ■和装の十羅刹女像

この普賢十羅刹女像研究の課題で最近注目されているのが、和装の十羅刹女像出現の理由です。近時集中的に普賢菩薩及び普賢十羅刹女像の論文を提示している増記隆介氏は、長寛二年（一一六四）の「平家納経」見返絵のそれについて、厳島社の伊都岐島神が女神であり女房の姿とイメージされていたことを根拠に、その和装化を女房姿の女神に求めました。

ただ、十羅刹女像の和装化の始まりをここで議論するつもりはありません。ここで問題としたいのは、和装十羅刹女像を伴なう普賢十羅刹女像成立のきっかけです。

その現存最古例は、現個人蔵で、旧益田家本とされるもので、その十羅刹女像と「紫式部日記絵巻」の女性像がよく似ていることから、増記氏は十三世紀前半の作としています。増記氏は、この旧益田家本に、先行する和装の十羅刹女における型の継承を見て、先行事例として「ある時点で完成していた正統性のある普賢十羅刹女像」を想定し、その候補として、いくつか作例をあげています。

養和二年（一一八二）正月十二日の皇嘉門院追善像が「女房等手自所奉図」、つまり女房たちが自ら描いたものであったことや、治承五年（一一八一）の高倉院追善像を例示されました。

「平家納経」から旧益田家本の間に正統的な図様の成立を介在させようとするこの見解は妥当なもので、それに異を唱えるつもりはありません。ただここでは、この源氏一品経供養という、狂言綺語観に基づく特異な法会と、導師澄憲の存在に、直接的な契機を求めることができるのではないかと想像するものです。

十羅刹女が和装化するということは、これは見事なまでの「唐」から「和」への変貌です。仏教・仏画を「唐」に

見立てるのなら、それへの「和」の侵入でしょう。また言い方を変えれば、聖なる仏画への俗なる要素の侵入ということになります。極端な言い方をしますと、聖なる仏画に俗なる物語絵が入り込むという感じですが。これと同じことがこの源氏供養の一品経にも言えます。聖なる経巻の莊嚴として、俗なる源氏絵がその見返絵に描かれた。であれば、各品の見返絵に源氏絵が描かれた『法華経』を供養するこの源氏供養において、おそらく同時に供養された仏として、俗なる女房装束の和装十羅刹女に囲まれた普賢菩薩こそふさわしいのではないのでしょうか。聖俗の境界が融解したこの源氏供養という法会こそ、和装普賢十羅刹女像の出現のきっかけにふさわしいと思われまふ。

そもそも一品経供養は、その始まりから、かなり遊興的性格の強い法会でした。その五巻日の華麗さの競合はそれを示して余りありません。『法華経』第五巻の提婆達多品を供養する日というのがあり、これが五巻日で、その日に非常に華麗な捧げ物をします。経箱などの工芸品にしるお経にしる仏像にしる、そこで非常に美しいものが生み出されたのですが、『法華経』の法会はまさに美麗を生み出す舞台となっていたのでした。

皇太后宮妍子の場合でも、「おのおの挑みわざのやうに見えて、なかなか罪作りに見えたり」（『栄花物語』）とあって、美麗を競う遊興の観さえあります。

源氏供養という珍奇な趣向も同様で、源氏耽溺の罪障に対する真摯な反省のみから行われたと思うことは困難です。そのことが供養される経典や仏に世俗的要素を侵入せしめたと考えられるのではないのでしょうか。

旧益田家本のような和装の画像は、普賢菩薩の来儀を女房たちが目の当たりにしているかのようであり、また普賢菩薩を中心とする法会の様子自体を再現したかのようにも見えます。いずれにせよそこには、宮廷の高貴な女性たちやその女房たちの理想の反映を見てよいものと思われまふ。

普賢の影向Ⅱ来儀を待望する女房たちです。であればこうした画像が用いられる法会の主体者・発願主には女性こ

そふさわしいでしょう。この源氏供養は、おそらく美福門院加賀の主催で、八条院三条や按察など美福門院・八条院系の女房たちが結縁する法会であつたろうと思われます。となればやはりその場に、自らの姿に等しい和装の十羅刹女像に囲まれた普賢菩薩の姿がふさわしいと考えたのではないでしょうか。

またこの法会の導師澄憲は、その美声を武器に特に女性の人気を勝ち得たようで、待賢門院、美福門院、上西門院、八条院など、女院関係の事績がことのほか多いようです。これはおそらく上流女性の帰依を受けようとする澄憲ら安居院流の戦略の結果といえるでしょう。

おそらくは、「和歌政所一品経供養表白」やこの「源氏供養表白」の創作は、願主の求めに応じて多様化する法会への柔軟な対応を示すものだったと思われます。それと同じ対応が法会の本尊に対してもあつたのではないでしょうか。女性主体の法会に対して、法会参加者に対して、普賢の影向をより実感させうる具体性のある本尊が求められ、和装十羅刹女像がセットとされたのではないでしょうか。

以上、源氏供養という特異な法会と、澄憲の創意に和装の普賢十羅刹女像の成立をみました。もとより、確たる根拠のない議論で、想像の域を出るものではありませんが、画像の変容が經典などテキスト以外の別の事情によることもあり得るといふ事例として注目したいと考えています。

〔後記〕 本講演の内容は、次の論考とほぼ同じ内容である。

武笠朗「源氏供養と普賢十羅刹女像」（小嶋菜温子・小峯和明・渡辺憲司編『源氏物語と江戸文化―可視化される雅俗』所収）二〇〇八年五月、森話社。

源氏物語千年紀記念 実践女子大学・短期大学公開講演会

―『源氏物語』という文化―

平成二十年（二〇〇八）十月十一日（土）  
於 実践女子大学香雪記念館大教室

## 源氏供養と普賢十羅刹女像

実践女子大学 武笠 朗

【要旨】源氏供養とは、法華経を書写供養すること、源氏物語の作者と読者とともに救おうという法会で、院政期における源氏愛好と狂言綺語観が生みだした源氏文化の一端である。安居院澄憲の作とされる「源氏一品経表白」は、源氏供養のルーツとも見られる法会の表白で、法会は美福門院加賀を願主に澄憲を導師とした一品経供養で、1180年前後頃に行われたと推定されている。本講演では、この時の源氏供養の法会の復元を試

み、供養された法華一品経や法会の本尊がどのようなものであったかを推定する。経巻には見返し絵に源氏絵を伴う美麗な装飾経を、仏には和装の十羅刹女を伴う普賢十羅刹女の画像を想定する。いずれも聖なる仏・経に俗なる要素が侵入した院政期的表象とみなされる。

狂言綺語と源氏供養

狂言綺語Ⅱ「道理に合わない言と巧みに飾った語。小

説・物語または歌舞音曲などをおとしめていう。」〔広辞苑〕第六版〕

↓和歌や物語などの文芸を狂言綺語として、仏教信仰に対する過ちとみなす自省の認識。

源氏供養＝源氏一品経供養

☆「源氏一品経表白」(別紙参照) 後藤丹治論文より。

＝平安末期に行われたある源氏供養の表白。安居院澄憲の作。

表白＝法会の願意(願い事)や趣旨を華やかな美文で綴った文章。

法会の復元

願主「禪定比丘尼」＝美福門院加賀(？) 一一九三

藤原親忠女。美福門院得子に仕え、はじめ藤原為隆の妻となって絵師藤原隆信(一一四二～一二〇五)を生

み、のちに藤原俊成に嫁して藤原定家(一一六二～一二四一)を生む。一一七六年出家か。娘八条院按察の夫藤

原宗家(一一八九没)の結縁。

一一七六年～一一八九年の間にこの源氏供養は行なわれ

たらしい。

「表白」作者兼導師＝澄憲(一一二六～一二〇三)

説法唱導の名手。安居院流唱導の祖。藤原通憲(信西)息。子聖覚。

唱導＝法会の際表白文・願文・諷誦文などを読み説法を行なうこと。

澄憲のまわりに女性そして普賢十羅刹女像。一品経の復元

本源氏供養は法華経供養の法会。法華経八卷二十八品を道俗貴賤で分担書写しそれを供養した。いわゆる一品

経。結縁経とも。

法華経書写という善行の共同参加者を結縁者という。

結縁者＝息隆信、女婿宗家、加賀の子女・女房の参画。

経巻の体裁＝「経品々即宛物語篇目」「巻々端図源氏一篇」

↓見返絵に源氏絵を伴なう裝飾経。

梶谷亮治氏の試論↓「平家納経」(叡島神社蔵)などに

見られる物語絵のような図様・画風の見返絵を「物語絵様見返絵」と呼び、「平家納経」のそれを、この源氏一品経のような源氏絵を見返絵に採用した例ではないかとされた。経巻への世俗的要素の介入。

「平家納経」Ⅱ長寛二年（一一六四）

この源氏一品経は、例えば次のようなイメージ。

・徳川・五島本「源氏物語絵巻」の絵の部分を見返に持つ経巻。

・「平家納経」の物語絵様見返絵のある巻のような経巻。

藤原隆信（似絵をよくした絵師）の関与が気にかかる。

法華経関連の法会とその本尊

法華会、法華三昧、法華八講・三十講、一品経

釈迦如来、釈迦三尊、普賢菩薩、観音菩薩、法華曼荼

羅、宝塔

↓最も多いのが普賢菩薩（彫像・画像を問わず）

一品経供養の事例

・治安元年（一〇二二）九月、皇太后宮妍子（藤原道長娘）とその女房、無量寿院にて（『栄花物語』）。

・久寿二年（一一五五）九月五日、近衛院六七日「結縁経供養」、関白藤原忠通以下公卿及び室宗子以下女房が分担して法華経・金光明経書写。普賢菩薩の

画像（『兵範記』）。

・仁安元年（一一六六）九月六日、藤原基実追福「女房一品経供養」、基実母二位殿信子・室六波羅三位

殿盛子とそれぞれの女房計三十二人の結縁。「美麗究善」の一品経。普賢菩薩の画像（『兵範記』）。

亡者追善（故人追悼）のためが多い。

一品経供養の仏像

院政期に行われた多くのケースでは、供養に際し新仏が併せて供養された例が多い。その前で法会が展開。

普賢菩薩の例が多い↓小井川理氏によれば平安時代の一品経供養十四例中九例が（内画像が六例）。

マイケル・ジャメンツ氏の指摘

澄憲以後の安居院流の僧が関与した追善供養の多くに

普賢菩薩ないしは普賢十羅刹女像が供養されている(願文・表白等による)。

例、上西門院による待賢門院のための一品経表白↓

「凶十願王十羅刹聖容」。

本源氏供養は、澄憲主導の一品経供養。であれば：

↓普賢菩薩ないしは普賢十羅刹女像

普賢菩薩と十羅刹女像

普賢菩薩

法華経「普賢菩薩勸発品第二十八」、『観普賢菩薩行法経』所説。

↓法華経を信仰する者の前に現れその人を守護する。

来儀図⇨法華信者の前に現れた様子。六牙の白象に乗  
り合掌する姿。

作例、東京国立博物館本画像、大倉集古館の彫像など

優品多い。

十羅刹女

法華経「陀羅尼品第二十六」所説。

藍婆、毘藍婆、曲齒(こくし)、華齒(けし)、黒齒(こくし)、多髪(たほつ)、無厭足(むえんぞく)、持瓔珞(じようらく)、皐諦(こうたい)、奪一切衆生精氣(だついつさいしよじゅうしようけ)。

「陀羅尼品」で十羅刹女は、二菩薩、二天王、鬼子母とともに陀羅尼呪を唱えて、法華経を広める人を守護すると誓う。

単独の普賢菩薩像(来儀図) + 十羅刹女など⇨普賢十羅刹女像

久寿二年(一一五五)十月九日、故宗子(藤原忠通室)のための画像(『兵範記』⇨記録上の最古例)。

普賢十羅刹女像の作例

唐装↓京都・廬山寺本(平安時代十二世紀後半?)

和装↓個人蔵(旧益田家本、日野原家旧蔵)本(鎌倉時代十三世紀前半一二三〇年頃か)

唐装で始まりやがて和装も出てくる。

和装十羅刹女像の成立↓いつものように和装化したか？

単独の和装十羅刹女像⇨「扇面法華経冊子」(大阪・四天王寺)表紙、「平家納経」見返

「平家納経」のそのの根拠に女房姿の女神像のイメージ？

★和装の十羅刹女像を伴う普賢十羅刹女像成立のきっかけは何？

↓増記隆介氏は、旧益田家本について、それに先行する和装を伴う作例を想定し、それに治承五年(一

一八一)の高倉院追善像、養和二年(一一八二)正月十二日の皇嘉門院追善像を当てた。

↓この源氏供養という狂言綺語観に基づく特異な法会と、導師澄憲の存在がそれを生み出したのではないか。

供養された一品経⇨源氏絵を見返絵とする装飾経⇨聖なる経巻に俗なる物語絵の侵入。

この法会自体も聖と俗の融合状態。

であればそこで用いられた仏が同じような性格であってもなんら不思議はない。

十羅刹女の唐装から和装へ⇨唐⇨和への見事なまでの変貌。聖なる仏画への世俗的要素の侵入。仏画に物語絵が。この現象は、まさに一品経の場合と同じであり、源氏供養そのものの性格にも通じる。

美福門院加賀による女性中心の法会で、その好尚に併せて澄憲がコーディネートした法会であり、経巻であり、仏であったのではないか。

#### 【参考文献】

- ・武笠朗「源氏供養と普賢十羅刹女像」(小嶋菜温子・小峯和明・渡辺憲司編『源氏物語と江戸文化―可視化される雅俗』所収) 森話社、二〇〇八年。
- ・小峯和明「法会文芸としての源氏供養―表白から物語へ」(加藤睦・小嶋菜温子編『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』所収) 世界思想社、二〇〇七年。
- ・後藤丹治「源氏一品経と源氏表白」(『国語国文の研究

究』(四八)一九三〇年。

・小峯和明「唱導—安居院澄憲をめぐる」(『古典文学と仏教』(『岩波講座日本文学と仏教』九)所収)岩波書店、一九九五年。

・梶谷亮治「平家納経雑感」(『鹿園雑集』二・三合併号)二〇〇一年。

・有賀祥隆『法華経絵』(『日本の美術』二六九)至文堂、一九八八年。

・山本勉『普賢菩薩像』(『日本の美術』三一〇)至文堂、一九九二年。

・小井川理「平安時代—一品経供養と普賢菩薩画像制作について」(『美術史学』二四)東北大学大学院文学研究

科美学美術史研究室、二〇〇三年。

・Michael JAMENTZ「安居院流唱導における国文学と美術史の連絡—普賢菩薩・十羅刹女像を中心として—」(『国文学研究資料館編集・発行『国際日本文学研究集會会議録(第十九回)』所収)一九九六年。

・増記隆介「和装十羅刹女像の図像形成に関する研究—扇面法華経冊子・平家納経を中心に」(『鹿島美術研究』年報二一別冊)二〇〇四年。

・同「益田家旧蔵「普賢十羅刹女像」について」(『美術史家、大いに笑う—河野元昭先生のための日本美術史論集』所収)ブリュッケ、二〇〇六年。

「源氏一品經表白」（後藤丹治論文より）

夫文學之興、典籍之趣、其旨旁分、其義區異也、如來經并論、示戒惠解之因、遙開芥炎之門、周公書孔子語、專仁儀禮智之道、正君臣父子之儀、是以內典外典雖異、悉叶世出世間正理、若又左史記事、詳百王理亂四海安危、文士詠物、恣煙霞春興風月秋望、此外有本朝和歌之事、蓋日域風俗也、有本朝物語之事、是古今所製也、所謂落窪、石屋、寢覺、忍泣、狹衣、扇流、住吉、水濱松、末葉露、天葉衣、格夜姬、光源氏等也、如此物語者、非傳古人之美惡、非注先代之舊事、依事依人、皆以虛誕爲宗、立時立代、併課虛無物事、其趣且千、共唯語男女交會之道、其中光源氏之物語者、紫式部之所制也、爲卷軸六十局、立篇目冊九篇、言涉內外之典籍、宗巧男女之芳談、古來物語之中以之爲秀逸、艷詞甚佳美、心情多揚蕩、男女重色之家、貴賭事艷之人、以之備口實、以之蓄心機、故深窓未嫁之女、見之偷動懷春之思、冷席獨臥之男、披之徒勞思秋之心、故謂彼制作之亡靈、謂此披閱之諸人、定結輪迴之罪根、悉墮奈落之劍林、故紫式部亡靈、昔託人夢告罪根重、爰信心大施主禪定此丘尼、一爲救彼製作之幽魂、一爲濟其見聞之諸人、殊勸道俗貴賤、書寫法花廿八品之眞文、卷々端圖源氏一篇、蓋轉芻爲苜也、經品々即宛物語篇目、纏愛語爲種智、昔白樂天發願、以狂言綺語之謬、爲讚佛乘之因、爲轉法輪之緣、今此丘尼濟物、纏數篇艷詞之過、歸一實相之理、爲三并之因、彼一時也、此一時也、共離苦海、同登覺岸、（以上拾珠抄により、諸人雜修善集を以て補訂す）